

キャリアと文化の心理学(6)

へき地小規模校で学ぶ意義について考える

:「オートエスノグラフィックな発達」概念を手がかりに

土元哲平

筆者（以下、私）は2021年10月から11月にかけて、鹿児島県の硫黄島に3週間ほど滞在し、キャリア教育に関する研究（フィールドワーク）を行った¹。本稿では、私が硫黄島の調査校（A 学園とする）においてフィールドワークを実施するまでの過程と、A 学園でのフィールドワークの一端を紹介する。その上で、へき地小規模校で学ぶ意義について、「オートエスノグラフィックな発達」の概念を手がかりに考えてみたい。

はじめに

私が初めて三島村硫黄島を訪れたのは、5年前の2016年であった。その当時、鹿児島大学大学院教育学研究科で学んでいた私は、自分の出身である鹿児島県で理科教師になることを目指していた。鹿児島は離島が多い地域であり、島の生活について理解を深めたいと考え、離島（硫黄島）での実習を含む講義「島嶼学概論Ⅰ（三島村硫黄島講義）」を受講した。この講義は、2泊3日の日程で、硫黄島の見学やジャンベ体験などを通して、ジオパークや硫黄島の文化・歴史について学ぶという趣旨の講義であった。スケジュールの関係で、当時はA 学園に伺うことはできなかったが、島の自然（特に、硫黄島の海や硫黄岳）に圧倒されたことを記憶している（図1,2）。



図1 硫黄岳



図2 硫黄島のオレンジ色の海

それから5年後、再び硫黄島を訪れることができた。その理由は、博士学位取得後の研究課題として、「へき地（離島・山間部）におけるキャリア教育」の研究を始めたからであった。この研究の着想に至ったのは、私自身が、「自分の経験を活かし、どのようにキャリア教育を発展させることができるのか」を考える中で、自らが幼少期に経験してきた、離島や山間部における教育とキャリア教育とを結びつけられないかと考えたからである。へき地における生活は、交通の便が悪い、資源が少ない、何もない…など、

¹ フィールドワークは、立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会からの承認（衣笠-人-2021-7）を得た上で、研究参加者（教師、児童、保護者）へのインフォームドコンセントを得て実施した。

ネガティブな印象で語られることがある。しかし、一方で、そうした地域には、都市部にはない良さがあると考えていた。自分の中で、「なにかあるのだけれど、ことばにできない」もどかしさを感じていた。そして、この気づきを言語化できれば、キャリア教育を進展させることができるのではないかという期待も抱いていた。

子どもの「オートエスノグラフィックな発達」と小規模性

A 学園は、前期課程（小学校）と後期課程（中学校）からなる全校生徒 22 名の小規模校であった。A 学園は小規模であるために、他の学年と接したり共に学んだりすることが多いという特徴があった。例えば、小学 1 年生から中学 3 年生まで、すべての学年が 1 つの校舎（図 3）で学んでおり、朝活動の時間に全学年の児童生徒と一緒に校庭を走ったり、給食時間、昼休み、授業時間などを他学年の児童・生徒と過ごすことが当たり前の状況であった。さらに、A 学園では、海外から移住した親を持つ子どもや、山村留学の制度によって都市部から移住した子どもといった多様な背景を持つ子どもが学んでいた。紙面の都合上詳しい言及は避けるが、こうした環境において、先生方は、子ども一人ひとりの文脈や、興味、考え方といった発達に応じて、助言・指導をしているという印象を受けた。



図 3 A 学園の校庭と校舎

さて、フィールドワークを終えた今、へき地小規模校で学ぶことの意義について考えてみたい。以下では、A 学園が有している「小規模性」（例えば、1 クラスが 10 名以内）という特徴に限定して考察したい。A 学園におけるフィールドワークを通して感じたのは、そこが子どもの「オートエスノグラフィックな発達」を促す場になっているのではないかと、という点である。「オートエスノグラフィックな発達」という語は、第 4 回連載（土元, 2021）において用いた語であるが、これは自分自身や他者の文化を理解し、そうした文化に自分がどう関わるのかについて理解することを指す。オートエスノグラフィックな発達は、特にキャリア教育にとって重要な「自己・他者理解」や「人間関係形成能力」に関わっている。

小学生の時期には、心理的な問題への対処法が分からなかったり、自分や他人のことがうまく理解できなかったりすることが多々あると思われる。このような時期において、自己や他者との関係性を調整したり、他者を丁寧に理解したりすることが必要になってくる。その時、クラス内に多くの同級生がいれば（大規模校など）、仲が悪くなった相手と距離を取ったり、他の友人グループに移動したりというように、問題に直接向き合うことを避けることができる。このように、他者との距離を取ることも一つの解決策

ではあるが、それは問題を放置し、人間関係についての内省を放棄しているだけの場合もあるだろう。一方で、A 学園のような小規模校においては、そもそも同学年の子どもが少なかったり、学校全体の子ども数も多くなかったりするため、他者との関係が切り離せない中で人間関係を形成していく必要性が見出された。このことは、自己・他者理解に向き合う必然性を生み、オートエスノグラフィックな発達にとって重要な契機となると考えられる。この点に、キャリア教育という視点から見た、へき地小規模校で学ぶことの意義の一つが見いだされる。

おわりに

以上、本稿では A 学園におけるフィールドワークの一端を紹介し、「オートエスノグラフィックな発達」の概念を手がかりに、小規模校の一つの可能性を提示した。学校の規模に関わらず、子ども達一人ひとりに自己や他者と向き合う契機を創り出すことは、キャリア教育にとって重要である。このようなオートエスノグラフィックな発達が学校生活において具体的にはどのように見られるのか、どのようにそれを促進できるのか、といった点については、今後の課題としたい。

引用文献

土元哲平. (2021). 小学校におけるキャリア教育：「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達(キャリアと文化の心理学(4)). 対人援助学マガジン. 対人援助学会. 45. pp.318-322. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/52.pdf>

謝辞

A 学園の先生方、子ども達に感謝いたします。本稿で扱ったフィールドワーク調査は、立命館大学 研究推進プログラム（科研費獲得推進型）の助成を受け実施したものです。

バックナンバー

- 土元哲平. (2021). 職業指導からキャリア教育へ(キャリアと文化の心理学(5)). 対人援助学マガジン. 46. pp. 278-281. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/45.pdf>
- 土元哲平. (2021). 小学校におけるキャリア教育：「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達(キャリアと文化の心理学(4)). 対人援助学マガジン. 45. pp.318-322. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/52.pdf>
- 土元哲平. (2021). オートエスノグラフィックの特徴と主流の方法論(キャリアと文化の心理学(3)). 対人援助学マガジン. 44. pp.261-263. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol44/51.pdf>
- 土元哲平. (2020). 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィック(キャリアと文化の心理学(2)). 対人援助学マガジン. 43. pp.287-299. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/52.pdf>
- 土元哲平・サトウタツヤ. (2020). 教育・発達心理学とキャリア教育の接合(キャリアと文化の心理学(1)). 対人援助学マガジン. 42. pp.288-303. <https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol42/51.pdf>